

学校の運動会における組み体操の事故について考えさせられる記事が続いた。10月3日特報面「人間」フミッド』巨大化の危険」では大阪市が高さ規制をしたのに対し、東京都では規制する予定がないと自治体間の差を報じた。

実際に練習中に落下して一カ月以上入院した千葉の中学生にも取材(10日27面)。「組み体操を怖いという生徒は他にもいたけど、先生が熱心で口に出せなかった」と、子どもの側からこの問題に迫った。

18日1面では、実際にかかる子どもへの負荷をイラストで紹介。「周りにいくら教師がいても、子どもにかかる重量は一歩も軽くならない。教師には高さ七尺から落ちてくる子どもを受け止めることはできない」との専門家のコメント(3日特報面)はその通りだ。

自治体や学校の現場に任せることで、子どもの安全は確保されるのか。組み体操で年八千五百件以上の事故が起きており、専門家は「本人に過失がないのに事故に巻き込まれる点が組み体操の特徴」(10日27面)と指摘する。子どもが怖がるのも当然だが、文部科学省は授業や運動会などを安全に行うよう全国の教育委員会に通知するのみという。文科省に規制を促そうという署名活動への賛同が一週間で一人を超えたことも報じた(18日1面)。

この問題は運動会シーズンだけでなく、今後も継続して記事に取り上げてほしい。熱

## 新聞が子どもを守る

心になる先生の背景に、感動を求める親の存在があるのではないか。組み体操をした子どもたちは何を思っているのか。海外のメディアが、この問題をどう見ているのかも知りたいところだ。

10日社説は、児童相談所が対応した二〇一四年度の児童虐待の件数が前年度比20%増と過去最悪になったことに対し「出生率向上を言う前に」との見出しで、子どもの命を救う体制の強化を求めた。神奈川県厚木市の五歳児が放置されて死亡した事件の判決の記事(23日26面)にも心が痛んだが、子どもが命を失うような状況をそのままにして、出生率の目標を掲げるのは順番が逆だ。

「超高層という選択 子どもの育ち無視」(9日夕刊7面)では、高層化が進む中、

「そこで生まれ、育つ子どもたちが、どのような感性をもつのだろう」と問いかけ、欧州には超高層が少ないと指摘した。ひとり親家庭への児童扶養手当が、二人目以降は極端に少額になることに対し、増額を求める署名活動がスタートしたことも報じた(23日夕刊9面)。多くの国

には、子どもの権利の観点からさまざまな問題に焦点を当て、政府に改善を求める独立機関がある。だが日本にはなく、その意味で新聞が果たすべき役割は極めて大きい。(日本総合研究所主任研究員)

※この批評は最終版を基にしています。



池本 美香

## 新聞を 読んで